

●セントロ アテンシオン ペルソナリサダ エスティミア 施設訪問

団員 清水 尚美

スペインは、1994年にユネスコと共同開催した「特別なニーズ教育に関する世界会議」の開催地で、特別ニーズ教育、インクルーシブ教育の「発信地」である。

また、障害福祉は、1982年制定の「障害者社会統合法」に基づいて、障がい者に対する差別の撤廃や社会的統合が図られてきた。

バルセロナ市のあるカタルーニャ自治州は、所得、教育、医療のレベルは相対的に高く、スペインの中でも福祉政策、障がい児教育は他州に比べて特徴的であり、就学前の早期介入から就学、移行支援へとライフステージにしたがって統合的な施策を進めている。

なお、カタルーニャ自治州の人口は約757万人で、障がい者人口は約52万人と言われている。

視察を受け入れていただいたエスティミア施設のカルロス施設長さんの話では、スペインの障がい者施設は、州による直営のほか、州が支援するプライベート財団、または利益団体が運営を行っている。



(レクチャーを受ける視察団)

エスティミア施設は、州政府から援助をしてもらっているプライベート財団が運営しており、建物内はランドリーや

食堂、リハビリ室などがあり、4階以上は居住部屋を有する6階のビルであった。



(カルロス施設長さんによるレクチャー)

運営費の8割を州が負担し、残り2割は入居者の親が負担している。入居基準は、障がいの程度、家の収入、障がいの部位により州政府で統一されている。また、入居者の環境基準も法律で決められていた。

エステミア施設は、身体と知的85%以上の重度の障がい者を受け入れていた。職員構成は、医師が1人、看護師が2人、その他は作業療法士や介護職員、調理員等である。職種により給料が決まり、給料格差は最大1.6倍以内に留めている。

施設は、0歳から大人まで利用できる。3歳から21歳まで支援学校に行き、22歳から1日8時間、月曜日から金曜日まで施設内の作業所で職員に作業を教わる。作成した絵画や小物などは、イベントで販売し、売上金の1/2が本人に渡る。土曜日・日曜日は、コンサートやプールなど様々なイベントに出かけ、その際には付き添いや車の手配など数人が対応し、一人の費用は1ヶ月30万円である。ただし、医療費は無料なので職員の医師で対応できない場合は、救急車を呼んで病院受診をする。

州からの補助金だけでは赤字運営になることもあり、プライベート企業14社の協賛を得ていた。信用金庫には資金援助を、デザイン会社にはロゴの提供を、ピザ会社にはピザの提供などを受けていた。施設の運営評価は州が年1回

施行し、特に問題がなければ入札1回で10年間継続できる。

2015年度の実績としては、24時間対応の入居者20人を42人の職員が対応し、作業療法利用者34人を13人の職員が対応していた。33人の子どもの利用者には28人の職員が対応し、23回の活動と8回のイベントを実施されていた。



(施設内の視察風景)

最後に、カルロス施設長さんから、発達障がい子どもさんが増えて、新たな事業を開始されたと伺った。エスティミア施設は、3年前に開設したが、学校の職員から発達障がい子どもが増えて対応が難しくなっているとの話を聞き、昨年9月から実施していた。発達障がいと分かった段階で学校と家族が話し合い、1週間に1回エスティミアに通い、専門の職員から訓練を受ける。現在、発達障がい児童7人を職員7人で対応している。1～2年間継続すると子ども自身がコントロールできるようになると期待をされていた。

入居者の方と通訳を介して話をしたが、皆さん笑顔で話をされていたのが印象深かった。施設そのものが安心感を与えられる場所であり、家庭なのだと実感した。

障がい者政策の目的は、障がい者の権利を守り、障がい者が人として尊厳を持って、家庭や地域の中で障がいの有無に関わらず、その人らしい生活が送れ

るようにすることである。それは文化や価値観が違う国でも共通であるということ、エスティミア施設訪問で再認識できた。今回、学んだことを今後の議員活動の中で生かしていきたいと思う。



(施設玄関にて)